

IV まとめ

表8 赤城山南麓の古墳群における周堀と前庭の変遷

画期	周堀	前庭	周堀と前庭
I期(6C.末~7C.初)	円形 / 全周	墓道状・台形状	分離
II期(7C.中葉)	円形・不整形 / 全周	台形状	分離
III期(7C.中葉~後半)	不整形 / 全周せず	隅丸台形状	一体
IV期(7C.後半)	部分的な堀 / 全周せず	隅丸台形状・隅丸形状	分離
V期(7C.末)	部分的な堀・存在せず	円形	—

表9 赤城山南麓の古墳群における石室床面と前庭床面との関係

画期	石室構築方法	石室床面と前庭床面
I期(6C.末~7C.初)	地山整地	同一面
II期(7C.中葉)	地山整地	同一面
III期(7C.中葉~後半)	竪穴掘り込み	段差あり(石室床面 > 前庭床面)
IV期(7C.後半)	竪穴掘り込み	段差あり(石室床面 > 前庭床面)
V期(7C.末)	竪穴掘り込み	段差あり(石室床面 > 前庭床面)

表10 赤城山南麓の古墳群における玄門構造の変遷

画期	玄門構造
I期(6C.末~7C.初)	段積み
II期(7C.中葉)	段積み
III期(7C.中葉~後半)	段積み・不整角柱状
IV期(7C.後半)	不整角柱状・角柱状
V期(7C.末)	不整角柱状・角柱状

器横瓶の年代観だが、7世紀前半でも新しい時期を想定し、7世紀中葉に近い時期を与えたい。

(會田)

3. 総括(今井学校遺跡の調査成果)

(1) 立地

遺跡立地としては、粕川の右岸にあり、東辺に河川を利用している可能性がある。似たような立地として付近の前橋市梅木遺跡がある。こちらも東側に桂川の流路が存在する。自然地形を利用した巧みな立地である。その他全国的に見て、同様な立地の豪族居館は多く知られている(橋本1985)。河川交通と防御に配慮した立地であろう。

(2) 居館の形態と規模

今回の調査において、堀の南西コーナーが確認され、ほぼ居館の形態と規模が明らかになった。すなわち、北西辺は堀の内側で測って、1辺80mほどとなり、仮に北西コーナーを南東に延長して粕川の現・川岸までの距離、北東辺の長さの78mを若干超える距離であることが判明した。あるいは、当時の粕川川岸までの距離はもう少し延びていたと仮定すると、正方形を意識した屋地を形成していたものとも考えられる。この規模は6世紀中頃の伊勢崎市原之城遺跡の長辺165m、短辺108mには遠く及ばないものの、5世紀後半の高崎市三ツ寺I遺跡の1辺86mに匹敵する。地方豪族居館としては、大型の部類となる。ちなみに、内側の占有面積は、今井学校遺跡-6,552m²、原之城遺跡-17,280m²、三ツ寺I遺跡-7,396m²となる。

外郭施設 外郭施設の堀の規模は、今井学校遺跡—上幅4.0~6.6m、深さ0.8~1.0m、原之城遺跡—10~20m、深さ1.3m前後、三ツ寺I遺跡—上幅30~35m、深さ約3mというように、相対的に貧弱である。堀の断面形状は古墳時代の豪族居館に通有な断面逆台形になることが明らかになった。なお、堀の覆土に黒色腐植土が見られ、先回の調査で「導水施設」を確認したという（松村1990）が、常時の湛水は植物珪酸体分析の結果からはうかがえない。

堀の覆土上層には浅間B軽石（西暦1108年降下）の純層がある。その下には二次堆積の榛名山二ツ岳噴出火山灰（Hr-F A）が入っており、居館の造営は榛名山二ツ岳火山灰の降下後と推定される。それは土器の年代観と対応している。

(3) 出土遺物

円盤状土製品 出土遺物で特筆されるものに、第1トレンチの堀底面から出土した円盤状土製品（第9図2）がある。平面的に居館内部に近く、堀底からわずかに浮く程度で、出土状態から居館にともなうものと考えられる。確実な用途は不明であるが、実用品ではなく祭祀遺物と推定される。これと似たような土製品は管見ながら、東日本では数例知られている。静岡県下田市洗田遺跡において古墳時代中期から後期にかけての祭祀遺物の中に珠文鏡をはじめ、鈕をもつ鏡形土製品と円盤状土製品が多数認められ、後者も「鏡の模造品に加えて良いのではないか。」とされている（佐藤1993）。埼玉県さいたま市小井戸遺跡では7世紀中葉～後半の竪穴住居跡から円盤状土製品が1点出土している（山川1993）。同じく埼玉県北葛飾郡杉戸町下椿遺跡6号竪穴住居跡からも円盤状土製品1点が土玉6点などと共に確認されている。時期は鬼高I期とされている（宮1982）。群馬県内でも渋川市高源地東I遺跡から「円盤状土器」（坂口・小高2006）が出土している。F A降下以前のもので、今井学校遺跡例よりも古い5世紀後葉の例であるが、他に石製模造品もともなっており、祭祀に使用されたと推断される。5世紀末葉の前橋市西大室上諏訪遺跡2号住居跡からも同様な円盤状土製品が2点出土している。片方はカマドの埋没土中からの出土である。大きさは共に直径4cm前後で、厚さは片方が1.8cm、もう一方が0.6cmを有する。1点は片面の中央に突起状の摘み上げが見られ、鏡の鈕を表現したものと見なされている。もう一つは突起が無く、本遺跡出土例と変わらない。両者とも鏡を模したものとされている（深澤2005）。よって、本例も鏡を象ったものとみられる。故に、今井学校遺跡の居館内部に祭祀遺構が存在する可能性が高い。いわゆる豪族居館に祭祀的性格がうかがえることが指摘され（橋本1985）、本遺跡も同様に祭祀的要素をとまなうことが推定される。

土師器多孔甌 土器では、遺構にともなったものではないが、第4トレンチから採集された土師器甌（第20図42）がある。底部の半欠品ではあるものの、やや丸底気味の平底を有する多孔の甌で、直径5mm前後の断面円形を呈する棒状のものによって蜂の巣状に底部が穿孔されている。一般に、単孔、底抜けの甌が多い中、注目される存在である。今井学校遺跡では以前の発掘調査時にもほぼ完形の個体が1点出土しているようであるが、残念ながら出土遺構が現時点では不明である。群馬県内では、他に高崎市国府南部遺跡群をはじめ十数ヶ所で無把手平底多孔甌が確認されている。これと似たものは朝鮮半島で確認できる。特に平底多孔のものは朝鮮半島南部の全羅道地域に認められる（酒井1998）。この地域は近年、日本の前方後円墳や埴輪の流入が見られることで注目されている地域である。そのような関連の中で平底多孔の甌が日本列島の中に流入したことも考えられる。群馬県高崎市長瀬西遺跡からは韓式系土器の平底多孔甌が出土している（黒田2002）。これに把手が付くか否かは微妙であるが、これあたりが関東地方の土師器無把手平底多孔甌の初期モデルの一つになった可能性がある。大型単孔の甌に対し、多孔のものは小型鉢形を呈し、同一住居に両者が共存する例もあることから、機能分化していることも想定される。

古墳と須恵器横瓶 居館内部から発見された古墳に関しては、横穴式石室と須恵器横瓶との関係が注目される。われわれが第4トレンチで確認した古墳の横穴式石室の残骸において付近から須恵器横瓶（第16図10）が出土した。古墳出土例としては、群馬県高崎市綿貫観音山古墳の例がある。観音山

古墳では後円部の墳頂表土下1.4mから須恵器横瓶が1個体出土しており、墳丘構築過程で埋納されたものという。また、前方部墳頂からも別の1個体が発見されている。本例とは異なる在り方である。本遺跡4トレンチ1号墳と同様、石室入り口向かって右側の前庭から横瓶が出土した例としては、群馬県多野郡吉井町神保植松遺跡1号古墳の例（入沢2001）がある。類似した祭祀が想定される。

時期的には、横瓶の体部に対し口縁部（第16図9）が直接接合しないが、同一個体の可能性があり、口縁部端部の断面形の特徴から伊勢崎市見切塚1号墳例（深澤2004）に近いものの、より型式変化した例として、TK209～TK217型式併行のものと考えられる。居館が廃絶された後に群集墳の築造される墓域となったことがうかがわれる。

(4) 居館内部の景観

ところで、以前の調査で確認された竪穴住居跡のカマドの向きをもとにグルーピングしてみよう（第29図）。

I類：東カマド - 10号住居跡、17号住居跡

II類：北東カマド - 4号住居跡、7号住居跡、8号住居跡、13号住居跡、16号住居跡、18号住居跡

III類：北西カマド - 3号住居跡、9号住居跡、14号住居跡、19号住居跡

IV類：南西カマド - 1号住居跡、5号住居跡、15号住居跡

このうち、I類の10号住居跡は主軸が柵列・堀と平行にならず、柵列と切り合っているため、居館との同時存在はあり得ない。また、II類も7号住居跡のように柵列と堀の間の空間に入るものがあり、やはり同一時期のものではないと考えられる。残りのIV類のうち、15号住居跡が柵列に平行しているが近接している。よって、残りのIII類が居館にともなうものと推定される。この中には、L字形カマドを持つ大型住居の9号住居跡が含まれる点で注目される（第30図）。

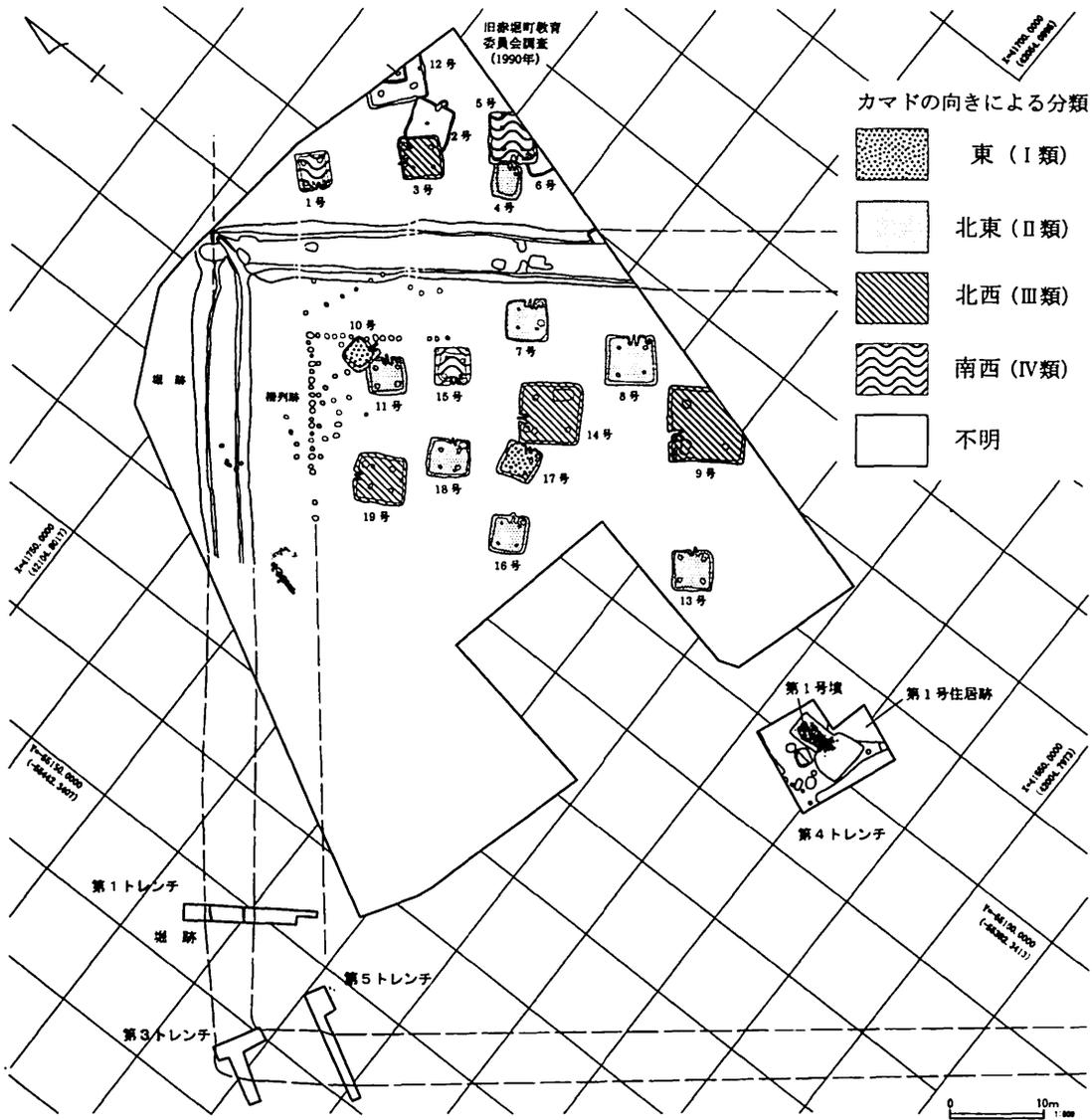
渡来系カマド L字形カマドに関しては、詳細を別稿（橋本2008ほか）に譲るが、畿内や北陸等に類例がある。後者は7世紀代の例で、ここではふれない。いずれも渡来的要素が強く、朝鮮半島との関連が濃厚である。半島では北部に石を使用したものが多く、南部に石を使用しないものが見られる。故に、石を用いない今井学校遺跡例は朝鮮半島南部からの影響によるものと推断される。

また、今井学校遺跡例にはカマド構築材の土製品がともなう。これと同様な例は同じく豪族居館の同市原之城遺跡（中澤1984）等からも出土している。今後、各地から出土している同種の資料と併せて朝鮮半島を視野に入れながら検討していきたい。

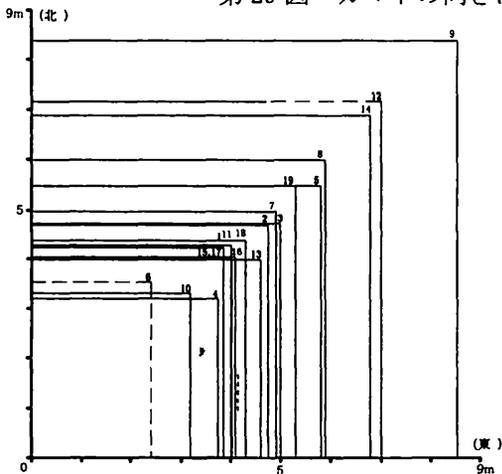
(5) 年代観

次に出土土器から、検出した遺構の年代観を考えてみよう。第1トレンチで確認された堀に関しては、出土土器が少なく、年代推定が困難である。唯一堀底付近から発見された土師器高坏（第9図1）が須恵器模倣坏に脚部を取り付けたもので、やや古相を呈しながらも、口縁部が少々外傾気味であり、体部と口縁部の境の稜が幾分シャープさに欠け、後述する第4トレンチ第1号住居跡の土師器須恵器模倣坏（第17図1）よりも新しい。しかし、肝心の口縁端部や脚部を欠損するので確実な年代観は不明である。少なくとも、堀の覆土に一次堆積のHr-F Aを含まないことから、居館の造営がHr-F A降下後である状況証拠とは矛盾しない。

第4トレンチ第1号住居跡については、出土遺物が多いものの、覆土上層と下層で年代観に開きがある。すなわち、第4トレンチ東壁沿いに入れたサブトレンチ内において下層の住居跡底面近くから出土したほぼ完形の土師器須恵器模倣坏（第17図1）に古相が認められる点は重要である。6世紀初頭まで遡る可能性もある。サブトレンチは幅が狭く、覆土の観察は容易ではなかったが、覆土中にF Aの純層は確認できなかった。坂口 一氏編年（坂口1986）のII期～III期に相当しよう。内湾し、内面に暗文を施す内黒の坏も共伴するものであろう。なお、住居跡の南西辺と北西辺の一部が検出されたが、これらは居館の堀に平行するし、II～IV類の住居跡等とも主軸の一致するものであった。さら



第29図 カマドの向きによる竪穴住居跡の分類



	東西 (m)	南北 (m)	面積 (㎡)
1号	3.85	4.25	16.4
2号	4.75	4.70	22.3
3号	5.00	4.75	23.8
4号	3.75	3.20	12.0
5号	5.80	5.50	31.9
6号	(2.40)	3.53	8.5
7号	4.90	5.00	24.5
8号	5.90	6.00	35.4
9号	8.55	8.40	71.8
10号	3.20	3.30	10.6
11号	4.00	4.30	17.2
12号	(4.70)	7.15	33.6
13号	4.60	4.00	18.4
14号	6.78	6.87	46.6
15号	4.02	4.02	16.2
16号	4.10	4.04	16.6
17号	4.02	4.02	16.2
18号	4.30	4.40	18.9
19号	5.30	5.50	29.2

注) 左図中、数字は住居跡の番号を、---は現存壁を表す。

第30図 今井学校遺跡竪穴住居跡規模比較図

に、この住居跡は調査範囲内では南西辺にカマドが存在する形跡は無く、北西辺と北東辺に関しては調査区外ということでカマドの位置は不明である。遺構検出面から出土した黒色土器（第18図5）は7世紀第Ⅲ四半世紀に下るものである。

居館外に位置すると考えられる第6・7トレンチで確認された竪穴状の落ち込み他から出土した土器には有段口縁坏（第28図2、第27図1）がともなう。元荒川以北、群馬平野部に分布する土器である。有段口縁坏Ⅲ期のもの（長谷川1995）で、6世紀末～7世紀前葉に位置付けられる。

第7トレンチで発見された古墳は埴輪などから6世紀後半の古墳と考えられるが墳形、規模は明らかではない。今後、居館との時間的關係をも含めて検討課題である。

その他、今回の調査で縄文前期・中期・後期、古墳時代前期の土器が確認され、居館造営以前にも断続的に人々がこの周辺に住み着いていたことが判明した。

(6) 土器胎土

本遺跡出土土器のうち、土師器7点、須恵器1点の計8点の土器に関して、胎土分析を行った。方法は岩石鉱物学的方法と蛍光X線分析法の2種類を同一のサンプルにおいてクロス・チェックのために試みたものである。このうち、試料No1（第22図2）の土師器球胴甕が肉眼観察で片岩を多量に含有し、異質である。三波川変成帯地域の藤岡周辺地域の土器であろう。蛍光X線分析では、試料No2（第22図1）の同じく球胴甕が異例とされたものであるが、岩石・鉱物学的には特異なものではなかった。なお、付近の中二子古墳の埴輪の中に藤岡方面の胎土の埴輪が存在することが指摘されており（前橋市教育委員会文化財保護課2005a）、該地との交流が注目される。

(7) 当居館と奥津城

居館と古墳との対応関係という視点では、目下のところ、同時期で規模的にも相応しいものとして近辺では前橋市後二子古墳（6世紀第Ⅱ～Ⅲ四半世紀築造、7世紀前半まで追葬継続、墳丘長85m）（前橋市教育委員会文化財保護課2005b）があげられる。ただし、両者の間には多田山丘陵が存在し、相互に視認できる位置関係にはない。よって、短絡的に両者を結びつけることには躊躇せざるを得ない。しかしながら、同一古墳群内の先行する前二子古墳の横穴式石室に朝鮮半島南部との関わりが指摘され（柳沢2006）、当地と彼の地との交流が脈々と続いていたことがうかがわれる。

おわりに

今回の調査に当たって、特に土地所有者の方々をはじめ調査現場・宿舎近隣の地域住民の方々、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、赤堀歴史民俗資料館のお世話になった。末筆ながら、御礼を申し上げたい。

なお、土器の問題に関しては別稿で再論を期す所存である。

（橋本）

参考文献

- 會田貴生ほか（2007）『新潟大学考古学研究室調査研究報告7』新潟大学人文学部
 入沢雪絵（2001）「県内の古墳出土の大甕について」『小八木志志貝戸遺跡群2』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 194-206頁
 大場磐雄・佐藤民雄ほか 1938 「南豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雑誌』28巻3号, 日本考古学会, 176-211頁
 加部二生（1999）「横穴式石室の前庭について—その起源と系譜—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集, 国立歴史民俗博物館, 1-45頁
 黒田 晃（2002）『剣崎長瀨西遺跡』高崎市教育委員会, 17・18頁
 酒井清治（1998）「日韓の甗の系譜から見た渡来人」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社, 27-38

頁

- 桜岡正信 (1991) 「7世紀以降の土師器坏の画期とその要因について—群馬県地域を中心として」『群馬考古学手帳』第2号, 群馬土器観会, 79-90頁
- 佐藤達雄 (1993) 「12洗田遺跡」『古墳時代の祭祀』I, 第2回東日本埋蔵文化財研究会, 155-156頁
- 坂口 一 (1986) 「古墳時代後期の土器の編年—三ツ寺Ⅲ遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係」『群馬文化』第208号, 群馬県地域文化研究協議会, 13-30頁
- 坂口 一・小高哲茂 2006 『高源地Ⅰ遺跡』群馬県中部県民局渋川土木事務所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 131頁
- 沢口 宏 (1981) 「上州平野の地形区分」『アーバンクボタ』19, 54-55頁
- 鹿田雄三 (1992) 「赤城山南麓における群集墳成立過程の分析—群馬県伊勢崎市蟹沼東古墳群を中心にして—」『研究紀要』10, 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団, 107-130頁
- 鹿田雄三 (1995) 「前庭をともなう古墳の編年—赤城山南麓における後期群集墳の動向—」『研究紀要』12, 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団, 71-94頁
- 鈴木毅彦 (2000) 「赤城火山」『日本の地形 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会, 58-61頁
- 早田 勉 (2000) 「榛名火山」「浅間火山」『日本の地形 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会, 61-70頁
- 田熊清彦 (1996) 「上野の7・8世紀の土器」, 大川 清・鈴木公雄・工楽善通 編『日本土器事典』, 雄山閣, 938-939頁
- 竹岡俊樹 (1989) 『石器研究法』言叢社
- 田辺昭三 (1981) 『須恵器大成』角川書店
- 中澤貞治 (1984) 「36 群馬県原之城遺跡」『日本考古学年報』34, 1981年度版, 日本考古学協会, 185-189頁
- 中村 浩 (2001) 『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 橋本博文 (1985) 「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢』Ⅱ, 早稲田大学出版部, 271-298頁
- 橋本博文 (2008) 「古墳時代豪族居館と渡来人の存在形態」『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨』日本考古学協会 (印刷中)
- 長谷川 厚 (1995) 「東国における7世紀への胎動—土師器からみた6世紀から7世紀の東国の状況—」『古代探叢』Ⅳ, 早稲田大学出版部, 443-476頁
- 深澤敦仁 (2004) 『多田山古墳群』群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 533頁
- 深澤敦仁 (2005) 『西大室上諏訪遺跡』前橋土木事務所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 22・24頁
- 前橋市教育委員会文化財保護課 (2005 a) 「第3章 整備に伴う基本データの収集 第1節 4古墳の範囲確認調査」『大室古墳群』前橋市教育委員会, 31頁
- 前橋市教育委員会文化財保護課 (2005 b) 「第3章 整備に伴う基本データの収集 第1節 4古墳の範囲確認調査」『大室古墳群』前橋市教育委員会, 36頁
- 松村一昭 (1990) 「今井学校遺跡発掘調査」『町内遺跡発掘調査概報』群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告29, 赤堀町教育委員会, 3-28頁
- 松村一昭・松村永子 (2000) 「今井学校第Ⅵ地点」『平成11年度埋蔵文化財発掘調査概報』群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告56, 赤堀町教育委員会, 2-8頁
- 松本浩一 (1976) 「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究』第80号, 11-30頁
- 宮 昌之 (1982) 『下榑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第18集, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 柳沢一男 (2006) 「5～6世紀の韓半島西南部と九州」『加耶、洛東江から榮山江へ』第12回加耶史国際学術会議, 19-46頁
- 山川守男 (1993) 「129 小井戸遺跡」『古墳時代の祭祀』Ⅱ, 第2回 東日本埋蔵文化財研究会, 415頁